

こころの救急箱 通信 第18号

2020年3月

発行：特定非営利活動法人 こころの救急箱 事務局：電話・FAX：06-6942-9092

Eメール cocorono9090baco@kpa.biglobe.ne.jp

URL http://www.cocorono99baco.or.jp



相談電話：06-6942-9090（毎週月曜日夜8時～火曜日朝3時）



「いのちに手を伸べて」 ～中村哲医師に学ぶ～

公益社団法人 日本キリスト教海外医療協力会 委員
NPO 法人「こころの救急箱」顧問 彼谷 廣子

昨年12月に、アフガニスタンで亡くなられた中村哲医師は1984年から1990年まで2期6年間JOCS（「日本キリスト教海外医療協力会」）のワーカー（医療従事者）としてパキスタンのペシャワールにあるミッション病院に派遣された。私が初めて中村さんにお会いしたのは遠い記憶だが、ワーカー時代に大阪で報告をされた時だった。義理人情にあつい侠気（おとこぎ）のある九州人、穏やかだが熱意に溢れ、生き活きと語られた若き日の姿を思い出す。「友のためにいのちを捨てること、これより大きな愛はない」というイエスの言葉を生きられた。

後年、講演会で司会をさせていただいたが、温かい気遣いや信頼、深い洞察力や胆力がまっすぐ伝わってくる方だった。上から目線でないのは言うまでもないが、謙虚とも低姿勢とも違う全くフラットな対等感が爽やかだった。

告別式には上皇ご夫妻や秋篠宮さまから弔電が届いていたが、何度も皇居に招かれアフガニスタンのことなどご報告されたそうだ。高いとされる立場にある人にも、戦火に追われ苦しむ人々にも彼は同じ態度で丁寧な真心を込めて接しただろう。

技術や理屈を超えて相手を思う優しい人情。相手と対等に、そして相手をどこまでも信頼する中村さんの姿勢はビフレンダー（相談員）の基本姿勢にも通じる。

亡くなられた翌日「援助する側の頭の高さが気付かず出ることがある。それを取り除かないと相手の心は開かれない・・・我々の物差しを一時捨てる必要がある」と新聞が中村さんの言葉を伝えていた。こころの救急箱は「コーラー（相談者）と対等、コーラーを信頼する（コーラー中心）」を基本にしているが、ビフレンダーとして常に自戒が必要だと思わせる。

中村さんは、パキスタン国境に難民が押し寄せると難民キャンプへ、さらに国境を越えてアフガニスタンへと診療活動を広げ、1990年にはJOCSを離れて中村ワーカーを支える会（ペシャワール会）を基盤に活動を継続された。集めた会費や寄付の9割以上を現地の為に使いたいから、とペシャワール会を任意団体としてボランティアで運営し、家族の生活費は講演料などを当てていたとも事務局からお聞きした。組織の枠組みを離れ、現場に即応できる選択をされたのだろう。

組織には諸種の制約もあるが現場で働く人あってこそその組織である。現場の思いや働きやすさを大切にすることが活動の継続や発展へとつながっていく。

「こころの救急箱」が、相談の現場にとって何が本当に必要か大切かを常に考えつつ、自殺の危機にあるコーラーを第一に、信頼と真心からの活動を続け、「一隅を照らして」いけるよう祈りたいと思います。

（写真はJOCS会報「みんなで生きる」から）